

現代社会におけるローカル・コモنزの意義

The significance of local commons in modern society

川田 美紀 (KAWATA Miki)

コモنزとして一般によく論じられてきた森林や河川などの空間は、日本では、ガスや電気の普及、あるいは都市的生活様式が浸透するにつれ、生業や生計維持のために利用されることがかつてよりも少なくなっている。そこで本研究では、自然資源の利用が前提にあって、持続的利用のための社会的制御が課題となるようなローカル・コモنزではなく、自然資源の利用が減退したローカル・コモنزを対象として、コモنزと人びととの関わりを調査し、現代社会におけるローカル・コモنزの意義を明らかにすることを目的とした。

3年間の研究期間のうち、1年目にあたる平成24年度は、ローカル・コモنزにおけるさまざまな自然資源の利用・管理のデータを収集した。事例地として選定した沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区では、生業や生計維持の観点からは大きな意味を持たない、周期的な資源の利用（ある特定の時期にのみおこなわれる資源利用）が、少なからず継続しておこなわれていたことがわかった。

2年目の平成25年度には、前年度に引き続き、古宇利地区において周期的な資源利用の実態調査を実施した。古宇利地区における周期的な資源利用には、おもに男性によっておこなわれるもの、女性によっておこなわれるもの、自家消費されるもの、お裾分けされるもの、換金されるものなどのバリエーションがあった。さらに、それらの利用については、複数の人たちで一緒に採取に出かけたり、採取してきた資源を一緒に採取に出かけた人びと、あるいは採取には出かけなかった人びとと分け合ったりする傾向がみられた。

最終年度である平成26年度には、周期的な資源利用のデータを引き続き収集するとともに、人びとがそれらの利用行動や獲得資源をどのように意味づけているのか、参与観察および聞き取り調査を実施した。その結果、事例地における周期的な資源利用行動は、単に資源を消費する目的でおこなわれているのではなく、地域に周期的に訪れる自然と関わるという感覚でおこなわれる側面があることがわかった。獲得した資源も、地域に訪れた自然を認識するアイテムとしての意味合いがあって、人びとの生活様式の変化や資源の経済的価値の変化に左右されにくい利用がなされていると考えられた。また、人びとはそのような資源利用を独占したり競い合っておこなうのではなく、一緒に採取に出かけたり、得られた資源を分け合ったりするべきだと考えており、周期的に訪れる自然の恵みをローカルな社会のメンバー間で積極的に共有しようとしていると考えられた。